

フレーベル賞入選童話

佳作 『蛙の子供』

吉井 正子

秋のお空は何處までも何處までも續いてゐます。雲一つ無いお空を見て居ますと、體中がじーんと熱くなつて來る様な日でありました。畑の隅にある垣根の間からビヨン／＼やつて來るものがあります、それは青い小さな蛙の子供でした。

今までその蛙の子供は垣根の向ふにある沼の中の、水蓮の葉つばの上に座つて居つたのです。そしてまだ見た事の無い陸を考へて居たのでした。「陸はどんな所かしら？子供がある陸に僕も行つて見たい」蛙はさつきから考へてゐたのでした。そしてさう／＼水蓮の葉つばの上から、青い秋のお空の映つてゐる水の中に飛び込んだのでした。

それでたつた今この垣根の間から出て來たわけなのです。ビヨン、小さい蛙は前足を踏む張つて空を見上げました。

陸から見上げた空は又さても綺麗でした。蛙はその出張つた眼を見張りました。そして急に嬉しくなつて「陸へ來たぞ」を鳴きました。蛙の喉がふく／＼動きました。

けれども其の時蛙は大眞面目な顔になつて前方を見つめました。そして黒い陸の土を踏みながらのそ／＼歩き始めたのです。けれども水の中と違つて早く行けません。

けれども一生懸命でした。

蛙の白いお腹が薄黒く汚れて來ました。そしてやつち着いたのは何處でしたせう。それは道端に咲いてゐる野菊の花の處でした。蛙はピョン／＼と菊の花の下まで飛んで行きました。

その菊は眞白な小さい花でありました。細かい花びらが一ぱい集つて一つの花になつてゐる可愛らしい花でありました。蛙はびつくりした顔で鳴きました。

「君は誰ですか？」つて。その花は黙つてゐました。そして何さと言へない良い匂ひが流れて來ました。

「ね、君は誰ですか？」今度は其の葉っぱに飛び着いて見ました。けれど黙つて花は一寸揺れただけでした。今まで蛙はこんな綺麗な、こんなに良い匂ひのするものは見たことがありませんでした。

蛙は暫く花の下で一人で良い氣持になつて居りました。きの位経つたせう。

蛙は急に思ひ出した様に歩き出しました。そして急に飛上つたかと思ふ垣根の向ふのお庭の方に飛び始めました。

「子供が居る、子供が居る」

蛙はお庭の石の陰からのぞいて思ひました。そして又のそ／＼歩き出しました。その時蛙は大きな音を聞いて飛上りました。そして見廻すさうでせう。

大きな木が幾本も幾本も立つてゐるではありませんか。

「おや、何時の間にか林に來てしまつた」小さい蛙がのそ／＼歩き出すと、おや？その林ものそ／＼ついて來るではないですか。そして林の上の方で「わー蛙だ」言ふ聲がします。

「はてな。あ、子供だ」、蛙はやつち氣がつかました。そしてふる／＼震へ出しました。

そして水蓮の上から出掛けて來るのでは無かつたと思ひました。

子供が意地悪をするこいふ事を、お母さんから聞かされてゐたこゝを今思ひ出したからなのです。

蛙は前足を踏ん張つたきり、前にも後にも行けなくなつて終ひました。もう捕へられるか、もう捕へられるが。蛙はすつかり困つてちごまつて小さくなつて居りました。けれぎわいわい言つてゐるばかりで捕へられる様子がありません。蛙がそうつみ歩き出すと林だと思つた足もぞろ／＼ついて來ます。

「びよん、ぞろつ、びよん、ぞろつ」

蛙が行く方向に足がついて來るではありませんか。蛙は一寸安心してそつみお耳を傾けました。子供が何さか言つてゐるからです。

そしたら「この蛙、迷子なんだよ」「生意氣に歩くからさ」「こんな聲がします。

蛙はこの時色々な氣がしてく／＼鳴きました。

「やあ鳴いた。早くお家へ歸してやらう」言ふ聲がしたかと思ふと澤山の足が一度にばたん音をたて、上の方でし／＼言ふ聲がしました。蛙はびつくりして又飛上つて終ひました。そして早く逃げ様さしましたが何處にも蛙が出る様なすぎがありません。

蛙は又すつかり困つて終ひました。この時「あ、蛙が困つてゐるよ。途が無いのだもの」つて言ふ聲がして前の方がぱつ／＼明るくなりました。

途が出來たのです。途が。蛙は急いで歩き始めました。歩いてゐる中に蛙の目から涙がこぼれて來ました。嬉しくて／＼蛙は一生懸命飛びました。

後からぞろ／＼子供達がついて來る足音がします。子供は愛國行進曲を歌つて居ります。そして何處までも何處までも蛙のお供です。かうして蛙はさう／＼沼の側まで來て終ひました。もう秋の日も夕方になつて、蛙が出掛ける時青かつた沼のお水には亦い夕焼が映つて居りました。

蛙はク、ウミ鳴いて沼の中に飛込みました。そしてあの蓮の葉つばの上に歸り着きました。蛙は今日見て來た陸の事を又考へました。そして陸は良かつたと思ひました。

蛙は廣いノ、紅い夕焼空を見上げながら「明日も天氣になーれ」ミカ一ぱいに鳴き續けてをりました。

をほり

佳作 『鼠さんの雪だるま』

山 本 ス マ

チュウ吉さんミチュウ子さんは可愛い、鼠の子供さんです。二人のお家は太郎さんのお家の
お二階にありました。お二階には小さなお窓がありました。小さなお窓からは何でも何でもそ
れはよく見えました。高い木でも、お空の雲でも、電線で遊んでゐる雀さんでも……。

ある晩チュウ吉さんは寢床へ入る前に、小さなお窓からお顔を出してお外を見て居りまし
た。お外は眞暗で何にも見えません。でも之中、眞暗なお空から白いものがひらひら落ちて
くるのが見えました。

「おやー雪かしらー」

チュウ吉さんはまあ面白いお眼々をくるくるさせ乍ら見て居りました。白いものはだんく澤
山になりました。

「雪だよ！雪だよ！チュウ子ちゃん！来てごらん」

ミチュウ吉さんは大きなお聲でチュウ子さんを呼びました。

「お兄ちゃんなあに」

チュウ子ちゃんは急いでやつて来ました。二人はもううれしくてうれしくてたまりません。
大きなお聲で